The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自伝的記憶の再構成メカニズムに関する研究 : 絵本を用いた検討
Author(s)	田渕, 恵; 河村, 諒; 中川, 威
Citation	生老病死の行動科学. 2006, 11, p. 63-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6771
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

原著論文

自伝的記憶の再構成メカニズムに関する研究
― 絵本を用いた検討 ―

Reconstruction mechanism of autobiographic memory : An examination using a picture book

(大阪大学人間科学部人間科学科) 田 渕 恵
(大阪大学人間科学部人間科学科) 河 村 諒
(大阪大学人間科学部人間科学科) 中 川 威

Abstract

The aim of the study is to clarify the reconstruction mechanism of autobiographic memory. Impression of the whole of early childhood, mood states in reminiscence and sex are taken into consideration as factors which construct reconstruction mechanism. The participants were 19 undergraduate students who have read the picture book titled "Guri and Gura" in their childhood. The experiment found that reconstructed autobiographic memory in early childhood had a similarity (some similarities?) to the impression of early childhood. Mood states and sex were not significantly associated with the reconstruction of autobiographic memory.

Key word : autobiographic memory, reconstruction mechanism, childhood

Ⅰ. 背 景

1. 自伝的記憶について

自伝的記憶（autobiographical memory）とは、わたしたちが日常経験する出来事に関する記憶の総体である。Tulving（1972）の分類に従えば、自伝的記憶はエピソード記憶（episodic memory）の一種であるが、幼児期健忘のような従来の長期記憶の理論では説明できない現象が含まれており、多くの研究者が自伝的記憶研究に携わっている。

自伝的記憶研究の重要なテーマのひとつは、自伝的記憶の機能を明らかにすることである。自伝的記憶の機能には３つあり、それぞれ自己（Self）機能、社会（Social）機能、指示（Directive）機能と呼ぶ（Bluck, 2003）。自伝的記憶の自己機能は、自己像の一貫性を維持する上で重要であると仮定されている（Barclay, 1996）。また自伝的記憶の社会機能は、社会的関係を形成する上で重要な役割を果たす（Neisser, 1988）。例えば自分自身の過去について話すことは、一種の自己開示の役割を果たす。自伝的記憶の指示機能は、人が将来に向けて自己を動機付けたり、自分の価値観や態度を確認するために重要である（佐藤, 2000）。

自伝的記憶の機能を論じた研究は多く、特に自己機能は高齢者における回想法の研究に深く関連している（野村, 2002）。回想法における「自己語り」と自我同一性達成度との関係を指摘した研究から、自伝的記憶の自己機能に注目することが回想法をより理解するためには不可欠であることが伺える。しかし、一般的に回想法の研究にはその臨床場面での効果を調べたものが多く、高齢者を対象にして想起のメカニズムを検討する方向には発展しにくいようである。故に、想起のメカニズムを解明することは回想法の基礎的研究として重要であろう。そこで、

本研究では自伝的記憶想起の、メカニズムの側面に注目していきたい。

2．自伝的記憶の再構成

回想法に限らず、自伝的記憶の想起とは経験した出来事そのもののコピーではあり得ない。態度や動機から選択的に記憶が想起されたり、忘却されたりすることがわかっている。例えばトラウマ体験は多くの場合抑圧され、意識的に思い出せないことがあるが（Burnside, Startup, Byatt, Rollinson & Hill, 2004)、回復された記憶が偽りの記憶（false memory）であったことが判明し、社会問題に発展したことがあった（Woodward, 1994)。このように、自伝的記憶は想起時に変容し、再構成されることが知られている。では、自伝的記憶は何によってどのように変容し、再構成されるのか。Sanitioso, Kunda & Fong（1990）は、外向的な人と内向的な人を対象にして、各特性を反映する自伝的記憶を想起するように求めた。すると、外向的な人は外向的な経験を、内向的な人は内向的な経験を、それぞれ速く想起することが見出された。ある特性が好ましいという態度を持った実験協力者は、自伝的記憶からそれに合致する記憶をすばやく想起することができるのである。また、暗黙理論（implicit theory）の利用によっても記憶は歪むと考えられている（Ross, 1989)。

しかし、自伝的記憶の再構成的想起の機能については実際よくわかっておらず、ここでは精神分析学が有用な考え方のひとつだと言われる（Freud, 1915)。Freud は幼児期記憶や幼児期健忘の解明のために隠蔽記憶（Deckerinnerung）を提唱している。多くの人たちの場合、幼児期記憶は日常の何でもない印象を内容としていて、その出来事自体はその人に感情的影響を及ぼさなかったのに、細部まで詳しく記憶していることがある。一方、たとえ同じ頃に経験した出来事でも、重大で強烈に経験された出来事は記憶していないことがよくある。これは、幼児期の日常的記憶が重大で強烈な出来事の代理として想起されるためであり、こうした記憶を Freud は隠蔽記憶と呼んだ。何でもない日常の出来事が記憶されているのは、その内容が象徴的な、似たような関係によって本来の内容と結びついているためである。すなわち、何でもない日常の出来事に関する記憶の印象が、幼児期記憶における重大で強烈な出来事の印象を反映している可能性があるのである。ここに、幼児期全体に対する印象と、日常的出来事として想起される幼児期の記憶の変容との関連性について研究する意義が存在すると考える。

3．想起時の気分と想起内容

更に、自伝的記憶の再構成に関係する要因の1つとして、想起時の気分状態が考えられる。例えば抑うつ気分状態下においては、人は通常よりもネガティブな記憶を想起しやすい。Moritz, Glascher & Brassen（2005）は記憶実験の中で、抑うつ状態の参加者と健康的な気分状態の参加者の、記憶想起課題の成績を比較した。その結果、抑うつ気分の参加者は健康的な気分状態の参加者に比べて、一般的な言語（感情的な気分状態を喚起しないもの）の記憶想起成績は劣ったが、感情的な言語、特にネガティブな言語の想起においては、両者の成績にほぼ違いはなかった。この結果より、抑うつ気分状態においては、想起内容がネガティブなものに偏るという記憶想起バイアスがかかることが明らかとなった。同様に、Williams（1996）は気分状態と自伝的記憶想起の関係について明らかにしている。彼は自伝的記憶実験の中で、うつ傾向の参加者の自伝的記憶はこのような傾向をもたない参加者に比べてバイアスがかかるという現象を明らかにした。つまり、想起内容がうつ的になったり、うつ的記憶の想起スピードが

速くなったり、うつ的記憶の内容が非常に抽象的になったりするのである。以上のことから、自伝的記憶の再構成的想起において、想起時の気分状態は考慮すべき不可欠な要素であるといえる。

4．記憶の想起と性差

男女において脳のつくりや働きが異なることが近年明確にされてきている。従って、自伝的記憶の想起にも男女差が生じることが予測される。Davis（1999）は、成人男性と成人女性にそれぞれ子供時代の記憶を想起してもらい、自伝的記憶想起に性差があるかどうか調べた。その結果、女性のほうが男性に比べて子供時代のことを多く想起し、また想起のスピードも速かった。また Pillemer, Wink, DiDonato & Sanborn（2003）は、お年寄りの男女ともに日々の生活の内容を述べてもらい、その内容を記述するという実験を行った。その結果、女性のほうが男性に比べ、具体的でかつエピソード的、すなわち話の流れにそって記憶が想起されるということが示された。Shelley, Kimberly & Harlene（2000）は、成人の最も古い記憶における異文化のそして性別の相違を調べた。その結果、女性による記憶の記述のほうが、男性によるものに比べてより多くの情報を含んでおり、アジア人においては、女性のほうが男性より新しい記憶（つまり男性の記憶よりも未来の記憶）を記した。以上の結果をふまえると、女性の方が想起量や情報量が多くエピソード的な想起を行うために、記憶のつじつまが合うように想起し、記憶の変容が激しいという仮説を立てることができる。

5．方法論上の問題点

自伝的記憶研究を行う際に、幾つかの方法論上の問題が生じる。まず、倫理的配慮の問題である。自伝的記憶それ自体が非常に個人的なものであるため、研究で扱う際にはプライバシー保護のための十分な配慮が必要である。また、個性的データであるが故に、個人間の比較を行ったり、それらを総括して法則化したり概念化したりすることが非常に困難である。また、記憶の信憑性の問題も考慮しなければならない。記憶は再構成によってオリジナルのものから大きく変容していると考えられる。その変容の中身を研究する際には、当然オリジナルのものと照らし合わせ、信憑性を確かめる必要がある。ところがこの作業は非常に困難であり、容易に乗り越えられるものではない。この問題を乗り越える方法として、例えばオリジナルの事実を親に尋ね幼児の記憶の変容を調べたり、同じ経験をした兄弟に発言を求め、その発言率の一致度を調べたりする方法がある。これらの問題を乗り越える手段として、本研究では「絵本の記憶」に焦点を当ててみたい。「絵本の記憶」は、幼児期の記憶の一部として捉えることができる。幼い頃何度となく読んで記憶している絵本に何年もの時間をおいて再び触れたとき、その印象が幼い頃抱いていたものと随分違っていたという経験はないだろうか。それは、幼児期記憶の一部としての「絵本の記憶」が、想起することで再構成される為であると考えられる。「絵本の記憶」を用いた場合、自伝的記憶研究の問題点である「記憶の信憑性の問題」を乗り越えることができる。オリジナルの客観的事実として「絵本」が存在するため、第３者からでもその記憶の信憑性を確かめることができる。また、同じ「絵本」を記憶している人については、想起する対象が同一のものであることから、その記憶の変容を個人間で比較することができる。また「絵本の記憶」であると、個人のプライバシーに関わる記憶の内容に直接的に触れるわけではないため、倫理的問題の発生を最小限に抑えることができるものと考える。

Ⅱ．目　的

本研究の目的は、高齢者の回想法における基礎的研究を行うことを前提に自伝的記憶の自己機能メカニズムに着目し、健忘が多いとされる幼児期の記憶の変容と幼児期全体の印象との関連性を調べることで、記憶の再構成メカニズムを明らかにすることである。更に、再構成に関係していると仮定される幾つかの要因（想起時の気分状態、性別）についても着目し、それぞれに考えられる再構成への影響の仮説を検証することを目的とする。自伝的記憶の自己機能におけるメカニズム的側面に焦点を当てることで、高齢者の回想研究に応用することが可能な基礎的研究を行うことが、今回の主なねらいである。

Ⅲ．方　法

1．実験対象者

大阪府の大学に在学している学生19人を対象とした。この実験対象者は全員、本実験の実験材料として用いられた絵本「ぐりとぐら」を幼児期に読んだ、あるいは読んでもらった記憶のある者で、そのストーリーを一通り覚えていると認識している。

2．実験手続き

平成17年10月～11月に対象者を募り、実験を行った。まず、対象者は絵本のストーリーを、ストーリーの流れが明確にわかるように一通り記述した。また、その絵本全体の印象について、質問紙に回答を求めた。記述が終わると、それらの記憶の自信度について、１から10までの数値で表現してもらった。また、幼児期の印象、性別、その絵本を読んだ時期、抑うつ気分についての質問についても回答を求めた。以上の質問紙の記述が全て終了すると、対象者に絵本を提示し、５分間を目安として、一通り目を通すよう求めた。その後、対象者に絵本を実際に読んだ後の、絵本全体の印象について、質問紙への回答を求めた。

3．実験材料

記憶想起の対象として、絵本「ぐりとぐら」（なかがわえりこ作・おおむらゆりこ絵）を用いた。この絵本は、大学生100人を対象とした予備調査により、19％の人が「幼児期に読んだ、あるいは読んでもらった絵本」であり、「ストーリーを一通り覚えていて、かつ印象に残っている」と答えたものである。幼児期記憶の実験材料としての絵本選択において、予め以下の条件を設定した。

①対象者（大学生）の幼児期（小学校低学年まで）に出版されていた絵本であること。
②全国的に広く出版され、人気があったとされる絵本であること。
③ストーリー性のある絵本であること。抽象的なもの、あるいは明確なストーリー展開がないものは含めない。起承転結が明確であるものを選択する。
④モノトーンで描かれる絵本は避ける。色は絵本の印象に非常に影響を与えるものであると考えられるため、なるべく色彩豊かなものを選択する。

絵本「ぐりとぐら」は以上の条件を満たすものと判断し、本実験の材料として用いることを決定した。

4．質問内容

①絵本全体の印象、及び幼児期の印象に関する質問（20項目）

実験の中で絵本を読む前の絵本に対する印象と、実験の中で絵本を読んだ後の絵本の印象、及び幼児期全体の印象を、岡田（1984）によるSD法尺度を用いて測定した。このSD法尺度は20の形容詞対から成り、それぞれ5件法で印象を尋ねた（表1）。岡田（1984）の因子分析結果を参考に、これらの形容詞対を「統合性」次元、「充実性」次元、「力量性」次元、「柔軟性」次元の4次元に分け、それぞれの尺度得点を用いて分析を行った。

②対象者の性別に関する質問(1項目)

③絵本を読んだ時期に関する質問(1項目)

対象者に、絵本を読んだ時期(1.1～2歳　2.2～3歳　3.3～4歳　4.4～5歳　5.5～6歳)について、回答を求めた。

④抑うつ気分に関する質問(21項目)

対象者に、気分状態を測るものとして抑うつ気分に関する質問項目への回答を求めた。抑うつ尺度としては、ベック抑うつ性尺度（BDI）21項目を使用した。

表1　使用する形容詞対

1.	まとまった	-雑然とした	11.	安定した	-不安定な
2.	かたい	-柔らかい	12.	暗い	-明るい
3.	貧弱な	-豊かな	13.	弱い	-強い
4.	女性的	-男性的	14.	充実した	-空虚な
5.	深い	-浅い	15.	不調和な	-調和した
6.	こせこせした	-のびのびした	16.	積極的	-消極的
7.	動的	-静的	17.	アブノーマルな	-ノーマルな
8.	未熟な	-成熟した	18.	にぎやかな	-さびしい
9.	開放的	-閉鎖的	19.	緊張した	-くつろいだ
10.	小さい	-大きい	20.	愉快な	-不愉快な

Ⅳ．結　果

1．幼児期の日常的記憶の印象と、幼児期全体の印象との関連性

岡田（1984）の因子分析結果を参考に、SD法で用いた20の形容詞対を4次元に分け、次いで各次元における「想起時の絵本の印象(before)」「絵本を読んだ後の絵本の印象（after)」及び「幼児期の印象」の平均尺度得点プロットを同次元に配置し、比較を行った（図1）。

「想起時の絵本の印象」「絵本を読んだ後の印象」及び「幼児期の印象」の各得点について、次元ごとに繰り返しのある被験者内分散分析を行った。第1次元「統合性」においては、有意な主効果がみられた（$F(2,36)=13.717$　$p<.000$）。Bonferroniの多重比較を行ったところ、「想起時の絵本の印象」と「幼児期の印象」との間に有意水準5％で有意差が認められた。また、「絵本を読んだ後の絵本の印象」と「幼児期の印象」との間にも有意水準5％で有意差が認められた。「想起時の絵本の印象」と「絵本を読んだ後の印象」の間には有意差は認められなかった。第2次元「充実性」においては、有意な主効果が見られた（$F(2,36)=9.563$　$p<.01$）。Bonferroniの多重比較を行ったところ、「絵本を読んだ後の絵本の印象」と「幼児期の印象」との間に有意水準5％で有意差が認められた。また、「絵本を読んだ後の絵本の印象」と「想

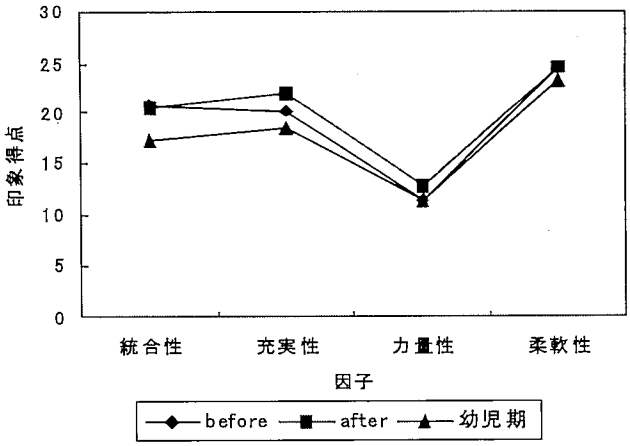

図1　絵本の印象と幼児期の印象

起時の絵本の印象」との間にも有意水準５％で有意差が認められた。「想起時の絵本の印象」と「幼児期の印象」の間には有意差が認められなかった。第３次元「力量性」においては、有意な主効果が見られた（F(2,36)=8.858 p<.01)。Bonferroni の多重比較を行ったところ、「絵本を読んだ後の絵本の印象」と「幼児期の印象」との間に有意水準５％で有意差が認められた。また、「絵本を読んだ後の絵本の印象」と「想起時の絵本の印象」との間にも有意水準５％で有意差が認められた。「想起時の絵本の印象」と「幼児期の印象」の間には有意差が認められなかった。第4次元「柔軟性」においては、有意な主効果は見られなかった（F(2,36)=1.872n.s)。

これより、絵本の印象において、「想起時」と「絵本を読んだ後」で有意な変容が認められた第２第３次元においては、「想起時の絵本の印象」が「絵本を読んだ後の印象」よりも「幼児期の印象」に類似した印象となっていることが分かった。

２．想起時の気分と、幼児期の日常的記憶の印象変化

想起した時と実際に絵本を読んだ後の絵本の印象の変化に、想起時の気分が関係しているかを調べるため、結果２と同様、岡田（1984）の因子分析結果を参考に20の形容詞対を４次元に分け、各次元において、「絵本の印象の変化」を従属変数、「想起時の気分」を独立変数とした、単回帰分析を行った。ここでの「絵本の印象の変化」は、実際に絵本を読んだ後の印象得点を基準とし、そこから想起時の絵本の印象得点を引いた値を用いた。

単回帰分析の結果、第１次元の「統合性次元」において、「絵本の印象の変化」に対し「想起時の気分」が有意な負の影響を与えていた。つまり、抑うつ傾向の高い人ほど、想起時の絵本に対して、実際に絵本を読んだ後よりも、より「まとまった」「安定した」といった統合性の高い印象を抱いていることがわかった。一方、他の3次元では、有意な関係性は認められなかった（表２）。

３．性差と、幼児期の日常的記憶の印象変化

幼児期の日常的記憶の変容に、性差が関係しているのかを調べるため、「絵本の印象の変化」について男女で独立したｔ検定を行った。ｔ検定の結果、「統合性次元」（t=-0.137, n.s.)、「充

表2　単回帰分析結果

独立変数	標準化係数（β）			
	1「統合性次元」	2「充実性次元」	3「力量性次元」	4「柔軟性次元」
想起時の気分	−0.597**	0.060	−0.434	−0.080
R^2	0.357	0.004	0.188	0.006
自由調整済み R^2	0.319	−0.055	0.140	−0.052

**P<.01

実性次元」(t=1.097, n.s.)、「力量性次元」(t=0.349, n.s.)、「柔軟性次元」(t=-1.238, n.s.) において、男女間での有意な差は認められなかった。

V．考　察

1．幼児期記憶の再構成メカニズム

幼児期の日常的記憶と、現時点での対象物の印象が有意に変化していた「充実性次元」及び「力量性次元」において、幼児期の日常的記憶の印象と幼児期全体の印象との間に有意差が見られなかった。このことから、Freud (1915) による精神分析的アプローチから考えられる自伝的記憶の再構成メカニズムの仮説が検証されたと考えられる。

本研究より、幼児期の印象と、変容し再構成された幼児期の日常的記憶の印象が類似していたことが示された。ごく初期の幼児期記憶の内容は、恐怖、恥辱、身体の苦痛などの強烈な感情を引き起こした出来事や、疾病、死、火災などの重大な出来事が頻繁に選択される (Freud 1915)。従って幼児期全体の印象は、そうした重大で強烈な出来事の印象により再構成される。こうした幼児期の印象と、想起された幼児期の日常的記憶が類似した印象を持つということは、想起された幼児期の日常的記憶が、重大な出来事の代理として想起された隠蔽記憶 (Deckerinnerung) となっていると考えられる。幼児期の日常的記憶の印象と、現時点での印象との間に有意な変容が見られなかった「統合性次元」及び「柔軟性次元」においては、「充実性次元」及び「力量性次元」に共通して見られた幼児期全体の印象との類似性が見られなかった。つまり、幼児期の日常的記憶の変容が見られた次元においてのみ、幼児期全体の印象との類似性が確認された。このことからも、幼児期の日常的記憶の変容と、幼児期全体の印象との関連性を見ることができ、再構成メカニズムに関する本研究の仮説が検証されたことが示唆される。

幼児期の日常的記憶の変容がなぜ「充実性次元」及び「力量性次元」においてのみ確認されたのかについては、本研究のみでは明らかではないが、仮説として2つの理由が考えられる。上述したように、Freud の再構成想起の適応的機能の考え方から、過去の抑圧されたトラウマ経験の記憶は、幼児期全体の印象の再構成、及び想起される幼児期の日常的記憶の再構成に影響している。「充実性次元」及び「力量性次元」でのみ記憶印象の変容が見られたのは、意識下に抑圧された記憶の充実性・力量性的側面が、他の印象の側面よりも隠蔽記憶に置き換えられやすく、オリジナルの記憶を歪ませやすいと考えることが出来る。あるいは、自伝的記憶におけるこの2つの次元の印象は、他次元の印象と比べて長期にわたって保持されにくく、変容しやすい側面であると考えることもできる。これは、両次元が多次元の形容詞対に比べて直感的に捉えやすく、記憶の印象をより直接的に表現しているため、想起時の日常的幼児期記憶

のそうした印象の側面がより影響を受けて変容したと考えられる。しかし、いずれの仮説も本研究のみでは検証できず、またそれを検証できるだけの十分な先行研究がないため、今後はこの問題に対して更に検討していくべきであると考える。

2．想起時の気分と想起内容の変容

第1次元の「統合性次元」において、「絵本の印象の変化」に対して「想起時の気分」が有意な負の影響を与えていた。このことより、想起時の気分が抑うつ傾向に傾くほど、幼児期の日常的記憶の印象が統合性の高い印象を抱くと考えられる。これは、Williams（1996）らの研究を基に立てた、ネガティブな気分状態に偏りの激しい人の想起はよりネガティブな方向への偏りが激しくなる、との仮説に反する結果となる。これについては、今回用いた分析方法を再検討する必要が考えられる。分析で用いた「印象の変化」は、現在の対象物に対する印象を基準としており、この基準となる印象が気分に左右されないことを前提に用いた変数であったが、現在の対象物に対する印象が現在の気分に左右されることも当然考えられることである。想起時の気分の再構成への影響を明らかにするという本研究の目的を果たすため、想起内容の印象変化を変数として用いるのであれば、基準となる対象物の印象を一定にしてから分析を行う必要がある。同様に、ネガティブな気分状態の人は変容がより大きくなるという仮説についても、一定の印象基準がないために本研究のみでは明らかにすることは出来ない。この問題を解決するためには、本研究で用いた対象物について、あらかじめ一般的な客観的印象を測定しておくべきであったと考える。また、気分の尺度として抑うつ状態を測るもののみを用いたことも問題であったと考える。気分状態と自伝的記憶の想起の関連を調べた最近の研究では抑うつ患者を対象としたもの（Moritz, et al. 2005; Nikendei, Dengler, Wiedemann & Pauli, 2005）や、ベック抑うつ尺度を用いたもの（Williams, 1996）が多く見られたため、本研究でも抑うつ尺度得点を気分状態の指標としたが、今後は抑うつに限らず不安尺度やその他様々な気分に関係する尺度を用いて検討したい。

3．記憶の想起と性差

分析の結果、想起内容の印象の変容については、男女間で有意な差が認められなかった。従って、女性の方が想起量や情報量が多くエピソード的な想起を行うために、記憶のつじつまが合うようになど、記憶の変容が激しいとする本研究の仮説は、検証することが出来なかった。これは、今回対象とした協力者の男女比に偏りがあったためであると考える。加えて、参加者が男女とも少なかったことも問題である。これは、自伝的記憶の男女差を調べたいくつかの先行研究と比較しても明らかである。高齢者にインタビューを行って自伝的記憶の男女差を調べたPillermer et al.（2003）の研究では、全体として157人を対象としており、その中で男性76人、女性は81人であった。この男女の内訳はほぼ同数と見なすことが出来る。また、成人の最も古い記憶における性差の相違を調べたShelley, Kimberly & Harlene（2000）の研究においては、全体として96人の参加者を対象とし、その中で男性48人、女性48人であった。本研究ではとりわけ男性の人数が少なすぎたため、今後はより参加者の数を増やし、男女比を同等にした上で分析を行う必要がある。更に、今回は男女比の偏りが大きかったため、内容分析による男女比較を行わなかった。ストーリーに関する記述として得た質的データを内容的に分析すれば、あるいは記憶変容の性差が見られたかもしれない。

Ⅵ．本研究の課題

まず、本研究で用いた質問紙の構成についての問題点を考える。本研究では幼児期の日常的記憶の印象と幼児期全体の印象との関係性を明らかにしようと試みたが、各尺度の提示順序を考慮しなかったことは問題であると考えられる。本研究では幼児期の日常的記憶としての「想起時の絵本の印象」尺度の直後に、「幼児期全体の印象」尺度を協力者に提示し、その後絵本を提示したのちに現時点での対象物の印象を測る尺度を用意した。そのため、幼児期の日常的記憶の印象と幼児期全体の印象との間に有意な関係性が認められたのは、協力者に提示した順番が非常に近かったためと考えることも出来る。直前に提示した尺度が直後の尺度評定に影響を与え、結果両者が類似した評定となることは十分考えられることである。また、対象物の印象変化を変数として用いた、分析上の問題がある。今回の分析では「現時点での対象物の印象」を基準とし、そこからどの程度異なっているかを印象変化と定めたが、本来協力者によって様々に異なるはずの「現時点での対象物の印象」を基準としたことにはかなりの分析上の問題が伺える。この問題を解決するためには、研究で用いた対象物に対して、予め客観的な一般的印象を用意しておくことが考えられる。

更に、本研究における実験協力者についての問題も挙げられる。まず、実験協力者の人数が非常に少数であったことから、本研究の結果を一般化することが難しいという問題がある。また、男女比に非常に偏りがあったことも、問題であると考えられる。

本研究では、自伝的記憶研究の方法論上の問題解決として絵本の記憶を用いたが、自伝的記憶のプライバシーの問題及び信憑性の問題については、この試みは成功したと考えられる。しかし、対象物を1冊の絵本に絞ったために、今回の結果のみでは、本研究の目的の１つであった再構成メカニズムの一般化・法則化は難しいと考える。今後は自伝的記憶研究において絵本を用いることの利点を最大限に生かしながら、対象とする絵本を増やし、比較することで、この問題を改善していきたい。

引用文献

Barclay C.R. 1996 Autobiographical remembering: Narrative constraints on objected selves. In D.C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory Cambridge*: Cambridge University Press. Pp.94-125

Bluck S. 2003 Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory.* 11(2) 113-23.

Burnside E., Startup M., Byatt M., Rollinson L. & Hill J. 2004 The role of overgeneral autobiographical memory in the development of adult depression following childhood trauma. *The British journal of clinical psychology.* 43(4) 365-376.

Davis P. J., 1999 Gender differences in autobiographical memory for childhood emotional experiences. *Journal of personality and social psychology.* 76(3) 498-510.

Freud S. 1915 Verdrangung. In Sigmund Freud Gesammelete Werke Bd. XIV. Frankfurt am Mein: S. Fischer Verlag GmbH. 井村恒郎・小此木啓吾（他訳） 1970 *フロイト著作集６　自我論・不安本能論* 人文書院 Pp.18-35,78-86.

Moritz S., Glascher J., Brassen S., 2005 Investigation of mood-congruent false and true memory recognition in depression. *Depression and anxiety.* 21(1) 9-17

Neisser U. 1988 Time present and time past. In M. M. Gruneberg, P. E. Morris, & R. N. Sykes(Eds.), *Practical aspects of memory: Current research and issues. Vol. 2. Clinical and educational implications.* Chichester: John Wiley & Sons. Pp.545-560.

Nikendei C., Dengler W., Wiedemann G. & Pauli P. 2005 Selective processing of pain-related word stimuli in subclinical depression as indicated by event-related brain potentials. *Biological Psychology.* 70(1) 52-60

野村春夫 2002 高齢者の自己語りと自我同一性との関連ー語りの構造的整合・一貫性に着目してー *教育心理学研究,* 50, 95-106.

岡田康伸 1984 箱庭療法の診断的側面-SD 法を中心としたひとつの試み *箱庭療法の基礎* 誠信書房 88-111.

Pillemer D.B., Wink P., DiDonato T.E. & Sanborn R.L. 2003 Gender differences inautobiographical memory styles of older adults *Memory* 11(6) 525-32.

Ross, M. 1989 Relation of implicit theories to the construction of personal histories. *Psychological Review,* 96, 341-357.

Sanitioso R., Kunda Z., & Fong G.T. 1990 Motivated recruitment of autobiographical memories. *Journal of Personality and Social Psychology,* 59, 229-241.

佐藤浩一 2002 思い出の中の教師ー自伝的記憶の機能分析ー *群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編,* 49, 357-378.

Shelley M., Kimberly U. & Harlene H. 2000 Cross-cultural and gender differences in childhood amnesia *Memory* 8(6) 365-376.

Tulving E. 1972 Episodic and semantic memory. IN E. Tulving & W. Donaldson(Eds.), *Organization of memory.* New York : Academic Press. Pp.381-403.

Williams J.M.G. 1996 Depression and specificity of autobiographical memory. *Cambridge University Press* 244-267

Woodward K.L. 1994 Was it real or memories? *Newsweek,* 14, 58-59.